愛着スタイルが外傷体験の意味づけに及ぼす影響
―複線径路・等至性モデルを用いて―

本研究では、外傷体験に対する意味付けやそこから心的外傷後成長に至る過程がそれ以前に保持されていた愛着とどのように関係しているのか，また外傷後成長を体験することによってその愛着スタイルがいかに変化するのかについて検討することを目的として，大学生・大学院生 3 名を対象に，質問紙調査と半構造化面接を行い，サトウ他（2006）が提唱した複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model : TEM）を用いて分析を行った。

その結果，調査協力者それぞれに愛着の形成の危機となるような体験が存在していた。また，それぞれ傷ついた体験をし，その苦痛ある体験に対する対処の方法に違いが見られた。傷つき体験後について，協力者全員が周囲の人に支えられたと感じ，自分自身についての気づきを得た。そして，傷つき体験についてポジティブな経験であったと意味付け，外傷後成長がおきていることも語った。このことから、傷つき体験以前に保持されていた愛着スタイルは，外傷後成長を体験することによって不安定な表象に向うのではなく，安定な表象に向うということが明らかになったように，外傷体験に対する意味付けやそこから心的外傷後成長に至る過程に大きく影響していることが考えられ、外傷後成長を体験することで，傷つき体験をする以前に保持されていた愛着スタイルに大きな変化が見られたことが明らかとなった。